



公演までは能をもっとよく知るためのワークショップ&展示を開催！ **参加無料**

14:00～(30分)



能楽楽器の紹介
&楽器体験

15:00～(30分)



八尾発祥の能流派
「高安流ワキ方」うたい謡体験

16:00～(60分)



装束と能面の解説
&体験

17:30～(30分)



八尾発祥の能流派
「高安流大鼓方」おおづみ紹介

ワークショップテキスト

令和7年 5月14日(水) 14:00～18:00

(公演 19:00～20:00)

主催 八尾市・(公財)八尾市文化振興事業団

協力 特定非営利活動法人高安能・カエパス

能（能楽）について

☆能は物語になっています。

能は演劇です。しかも現在でも演じられている、世界で一番古い舞台芸術なのです。14世紀ごろにできたミュージカルです。歌と踊りと音楽、そして永遠に変わらないテーマでの物語がそこにあります。

超自然的なものを題材とした能では面をつけることが多いのですが、面をつけないものもあります。その時でも仮面をつけているつもりで舞います。メイクはしません。狂言では、登場する人物は生きている人間であり面はつけないのが普通ですが、人間以外のものを演ずるときは面をつけます。

☆登場人物

シテ 主役。神・亡霊・化身・精・妖怪などが多いです。仮面をつけることで超自然的な役を演じます。

ワキ シテの相手役。僧・大臣などが多いです。現実に生きている男性でシテの思いを聞き出します。

ツレ 連れ合う者の意味で助演者。シテツレとワキツレがある。

アイ 能とは別に「狂言」として成立している演劇がありますが、能の中に登場する狂言を「間狂言」と呼び、おもしろく盛り上げながら、話の説明をする役割。

☆能面

能役者は能面をととても大切に扱い「おもて」と呼んでいます。

面をつけるのはシテ方の特権。しかし素顔ででる曲もあります。その場合でも「直面（ひためん）」といい役者は直面をいう面をつけたつもりで演じます。



☆装束は美術品

能の世界では衣装とは呼ばず装束といいます。

200年も前から残る織物なんて美術館でしか見られないと思ったらおおまちがい。今でも立派に舞台上で実用されています。

八尾と能のつながり

☆能楽高安流があること

能はプロの能楽師によって演じられますが、下記のように、それぞれ長い歴史を持ついくつかのグループにわかれています。能楽高安流はワキ方*と大鼓方**にあり、八尾の高安地区にある玉祖神社の神官がその始まりとされています。

シテ方 観世流
金春流
宝生流
金剛流
喜多流

ワキ方

高安流
福王流
宝生流

囃子方

笛方

一噌流
森田流
藤田流

狂言方

大蔵流
和泉流

小鼓方

幸流
幸清流
大倉流
観世流

大鼓方

葛野流
高安流
石井流
大倉流
観世流

太鼓方

観世流
金春流

*ワキ方とは・・・

主役（シテ方）の相手役。必ず現実の人間で場面の設定や説明をする。

**大鼓方とは・・・

「おおつづみ」「おおかわ」ともいう。
テンポをリードすることが多い。甲高い、緊張感のある音が特徴。

☆古い物語や記録のなかに八尾や高安が登場すること

八尾の東側にある高安山は、1300年以上まえの歴史書『古事記』にも書かれているほど古くから知られた山であり、大阪と奈良のあいだを行き来しようとすれば、この高安山を越えなければなりません。そのため、たくさんの人や物が行き交い、そこから文化が生まれてきました。

能（能楽・最初猿楽）は、村の祭りおなむらと、村をまもる神様に田や畑にたくさん食べ物ができることをお願いするために、「舞」を奉納していたのが発展し、笛や太鼓の伴奏がつき、職業化していったのではないかと考えられます。

1347年京都で、観阿弥・世阿弥の親子が演じた能が将軍足利義満に大変気に入られたことがきっかけで、武士の上層階級に広がりました。

また、恩智神社を拠点とした高安太夫と名のる能楽師のグループの記録があり、八尾市内の古い家に翁面などが保管されきました。これらは、高安山の近くでは村人まで能を楽しむ暮らしをしていたことを物語っているのではないのでしょうか。